

イエスは弟子たちを派遣するのは「狼の群れに羊を送り込むようなものだ。」と言ったと記されています。狼は弟子たちを迫害するユダヤ教徒を指します。16 節の後半の言葉は、蛇のような賢さは鳩のような素直さでなければならない、という意味です。「鳩のような素直さ」とは、自分の力や策略、知恵によって歩むのではなく、神さまに身を委ねて、神さまの守りと導きを信頼して歩むことを意味しています。17 節の「会堂」の原文は「彼らの会堂」で、このことから、共同体とユダヤ教が敵対関係にあったことが示唆されます。また、18 節では総督や王の前における裁判を記しています。これは異邦人への伝道のなかから生じた言葉と思われ、著者が、弟子たちの働きの対象がイスラエルに限定されていたイエスの時代ではなく、異邦人に遣わされている自分たちの時代の視点で書いていることを示しています。19～20 節で著者が述べていることは、「語るべきことは、その時その時に、あなたがたの父の霊、聖霊によって与えられる」ということです。このことは、イエスが弟子たちを遣わすに当って、何の備えもいらない、必要なものはすべてあなたがたの父なる神さまが与えて下さる、その恵みに信頼して歩め、と言ったことと繋がります。23 節の言葉は、イスラエルでの宣教が思うように進まない、しかし同時にイエスの再臨はごく間近に迫っているという終末を期待していた共同体によって、イエスの言葉として伝承されました。この言葉は、弟子たちがイスラエルの町々を回り終わらないうちに世の終りが来て、弟子たちは苦しい宣教の使命から解放されるという、弟子たちへの慰めの言葉であると思われまます。

24～25 節の言葉は、ルカ 6:40 では、弟子は師に習い、師を目標として修業すべきである、という意味で用いられています。ところが、著者はこの言葉を、弟子や僕は自分の師・主人が受けたのと同じ扱いを受けるものであり、師が迫害されたのだから弟子も迫害を覚悟すべきである、という意味で用いているのです。ここで注目すべきことは弟子や僕を「家の主人とその家族の者」と呼び、イエスという主人のもとにいる家族とされていることです。その家族を結びつける絆は何か。それは、イエスが受けた無理解や迫害の苦しみを弟子や僕も共に受けることであり、イエスに遣わされた者として、この世において、狼の群れの中の羊のような存在として歩むことです。そしてそこで、自分の賢さ、力、言葉に寄り頼むのではなく、神さまの守りと導きに身を委ねて歩み、聖霊が与える言葉を語っていくことです。そのような歩みは神の家族の一員である私たちにも重なる歩みなのです。